

研究ノート

広島と呉のあいだ ——「船越町」近現代史を探索する

私が生まれた町、「占領軍「慰安所」「東洋一の兵器工場」「朝鮮人集落」の忘却

高雄きくえ

ひろしま女性学研究所代表



図1. 広島と呉のあいだにある船越町



図2. 府中(左)と海田にはさまれた船越町(筆者作成)
(「海田市」国土地理院より)

はじめに

1991年、韓国の金学順が「日本軍「慰安婦」だったことを公にしたニュースは衝撃だった。〈女〉にこだわり続けてきた私だが、改めて〈女〉という存在について深く考えさせられた。それは〈男〉の対語としての〈女〉だけではなく、国家や戦争と〈女〉についての思考を迫るものだった。

その衝撃に突き動かされて、その後、元「慰安婦」についての映画会、講演会、取材(当時私はミニコミ紙編集者をしていた)などをしてきたが、その過程で、敗戦直後、日本軍の戦地「慰安婦」制度の焼き直しとして、占領軍「慰安所」が駐留軍駐屯地に設置されたことを知った。広島県について調べるために『広島県警察百年史』(1971)を紐解くと、目を疑う一節に出会った。そこにはこうあった。

連合軍の本土進駐にあたり、国民が最も心配したのは「婦女子が乱暴されるのではないのか」ということであつた。閣議においても種々論議が重ねられ、八月十八日に警保局長から全国警察部長あてに「占領軍に対する性的慰安施設の急速な設営を実施すべき旨」指令した。(略)

警察部では、まず、広島・呉を中心とする貸座敷組合関係者に対し、「連合軍将兵の進駐を前にして慰安所がないということは、善良な婦女子の保護上重大な問題であるから、民族の保護という観点から早急に慰安所を設置してほしい」と呼びかけた。一般婦女子を守るために同族女性をもって防波堤とするという方策だった。(略)(容易に引き受けかねうという業者に対して)警察ではこのような情勢に対処し、県費三六万余円の予算を追加計上し、「資金は立て替える、女は警察が募集する、必需物資も警察があつ旋する」と業者に条件を提示し、熱心な説得を行った。そしてついに九月二十日、県下の各関係業者を集めて広島県特殊慰安協会(会長山本久雄)を設立した。(略)ひとまず安芸郡船越町・吉浦・厳島に各一か所、広町に二か所計五か所にそれぞれ工場あるいは徴用工員宿舍などを改造して、にわかづくりの慰安所が開設されるに至つた(p.414～415)。

文中にある「ひとまず安芸郡船越町・吉浦・厳島に各一か所、広町に二か所計五か所」のうち「安芸郡船越町」とは、私が生まれ、20歳まで暮らした町である。1975年に広島市と合併し、安芸区に編成された「広島市安芸区船越町」である。広島と呉のあいだ、海田と府中のあいだにある町である。

地図②を見ると、まるで私が大好きなそら豆の形に見える町であり、隣町府中町にある東洋工業(株)(現株マツダ)、父が働いていた日本製鋼所の従業員とその家族が暮らす何の変哲もない町というのが私の印象で、そのせいか「故郷」という意識からも遠く、広島市と合併して40数年たった今もその印象は変わらない。私はそんな町で、夕方になると海田湾からの海風に乗ってくる豚小屋の籠えた臭いに悩まされながら暮らす労働者家族の一員だった。

その船越町に占領軍のための「一般婦女子を守るために同族女性をもって防波堤」¹とする「慰安所」があつたというのだから驚いた。船越と「慰安所」がどうしても結びつかない。しかし、『広島県警察百年史』(1971)に記録されているのだから、嘘ではないだろう。では、船越のどこに、なぜ、いつあつた? 私はあまりに自分の町の歴史に無関心だったことを後悔し、占領軍「慰安所」についての本や『船越町史』(広島市、1981)などを読んでみたが、ほとんどが『広島県警察百年史』が出典とみられるものばかり。新しい情報はつかめなかった。

しかも私は船越小学校から地元の中学には行かず、広島市内の女子中高校に進んだ。当時は早く町から離れたいばかりで、関心などなかった。敗戦時だった母は亡くなり、16歳だった姉は認知症。公民館や区役所に尋ねてもみたが「記録されていないことはわかりません」とのこと。

しかし、この間、わかったことも多かった。父が働いていた日本製鋼所は戦前は「東洋一の兵器工場」であったこと、日本製鋼所ができる1920年（大正9年）頃までは海外移民が多かったこと、在日朝鮮人がたくさん暮らしていたことなど、私にとっては目から鱗のことばかりだ。すると、占領軍「慰安所」も私の知らない船越の「未知なる過去」として、抜き差しならぬ事実として、リアルに視野に入ってくるようになった。

では、占領軍「慰安所」、「東洋一の兵器工場」「朝鮮人集落」があった船越町とは、いったいどんな歴史を持つ町なのだろうか。本当に「何の変哲もなかった／ない町」なのだろうか。俄然「謎解き」意欲がむくむくと湧いてきた。

『広島県警察百年史』に占領軍「慰安所」の設置場所として「船越町」と記載されていたことが、私を地域史に導いてくれた。私は1970年代からウーマン・リブやフェミニズムを指針にしつつ、小さな媒体を通して社会との回路を言葉にする仕事をしてきたのだが、「歴史とわたし」というもう一つの交差点に立つことになった。

本論考は、私の「謎解き」の記録である。記録事項が取捨選択される市町村史、そこからは見えてこない町と軍需工場の密着性、軍需工場が歯止めになった海外移民、軍需工場および軍都が必要とした植民地・朝鮮人、今も継続する軍需工場とその後の広島湾の軍事性、一市町村だけでは成立しない「軍事都市」「平和都市」、そしてそうした歴史を生きた在日朝鮮人の証言と日本人の「在日体験」。

結果を言ってしまうえば、「何の変哲もない町はどこにもない」ということかもしれない。

町史と占領軍「慰安所」

繰り返しになるが『広島県警察百年史』の「第三節 連合軍特殊慰安所の設置」の中に見つけた「安芸郡船越町」が私を歴史に導いてくれた。だが、『船越町史』、米軍が進駐した船越の隣町『海田町史』には、「日米協会」が設

立され、賑わった当時の様子は書かれているが、「占領軍「慰安所」という文字は見当たらない。

ところで、「慰安所」は「安芸郡船越町」以外に「吉浦・厳島に各一か所、広町に二か所」の5か所設置されているし、その後、進駐地域の拡大によって「十一月末には前記の五か所のほか、福山・大竹・呉・江田島等の各地にも開設を見、慰安婦の数もすべて七二五人に達した」とある（『広島県警察百年史』p.416）。

では、その各地の町史には記録されているのだろうか。

まず、「厳島」の記録を調べるために当然あるだろう『宮島町史』を探した。あるにはあったが、現在『宮島町史 資料編』として、石造（1994）、建築（1998）、地誌紀行（1993）3巻が発行されているのみだ。世界的に有名な宮島町に暮らした人々の記録がないのを不思議に思い、宮島町歴史博物館に「通史編」はないのか問い合わせしてみた。職員は「いまのところ通史はないし、予定もない。要望はありますが…」という回答だった。

吉浦・広については記録があるのだろうか。平井和子著『日本占領とジェンダー』（有志舎、2014）という貴重な論考があるが、引用・参考文献には『呉市史』はなく、主に『新編広島県警察史』であることがわかる。私も確認したが、直接の記述はなかった。ただ、市史には「アメリカ占領軍進駐直後の状況」として「呉地区」と「広地区」の配置図が掲載されていて、その中では「アメリカ軍遊郭」と記入されている（『呉市史』p.319）。

福山市の場合はどうだろうか。福山市には1945年11月2日に連合軍米兵約1000人が大津野に進駐した。「福山市でも進駐に備えて、突貫工事で慰安所を設置した。この施設は、進駐してきた将兵には非常に好評だった」（『福山市史』p.961）とある。

次に大竹市。『大竹市史』（1970）にはこうある。「市域に進駐した米軍は[……]旧軍施設の武器弾薬類の処理や海外引揚所の監視などに当たったが[……]駐留軍の市域分駐にあたって婦女子保護の立場から駐留軍特殊慰安施設（三菱化成大竹工場社員寮）が設けられる」（p.362）とあるだけだが、先の平井和子（2014）や阪上史子（『大竹から戦争が見える』2014）には、大竹警察署長から広島県警察部長にあてられた文書が紹介されている。

「連合軍大竹地区進駐状況二関スル件（呉進駐関係綴一防衛研究図書館所蔵） 五 性的慰安施設 性的慰安施設ニツイテハ進駐后間モナク直接部

隊並県慰安協会県保安課ト密接シ、適地物色中成リシガ部隊駐屯地ヨリ約□□□□離レタル管下佐伯郡大竹町字小島新開三菱化成工場所属寮「養和寮」ヲ十二月九日之ガ施設トシテ決定シ即日慰安協会ヨリノ慰安婦八名ヲ収容シ開設シタルガ衛生ソノ他施設比較的整備シ居リタル関係上進駐軍部隊ノ人気ヲ呼ビ全ク昼夜兼行盛況ヲ呈シツツアリ」（平井和子、p.50）

そして江田島。江田島での進駐軍の任務は、海軍兵学校の完全武装解除。数千人に及ぶ日本人労務者が来島したが「それにつれて、中央には進駐軍相手の商店やキャバレー、急ごしらえのダンスホール等風俗営業に都市から多くの女性が集まり、多くはないネオンの光とジャズの調べは、夜中絶えることなく一時は外国の植民地のごとき観を呈していた」（『江田島町史』p.72～73）とあるが、「占領軍「慰安所」という記述はない。²

1991年金学順が日本軍「慰安婦」だったと名乗り出て以降、日本軍「慰安婦」研究は日韓両国で飛躍的に進んでいく一方、日本人「慰安婦」そして占領軍「慰安所」の研究がほとんどされていないことが指摘されるようになってきた。占領軍「慰安所」が船越町史から消されたことをきっかけに、私は公的な、正史であるとされる「村・町・市史」が、実はその時代の、誰かによって取捨選択されたものであることを痛感することとなった。日本人「慰安婦」、占領軍「慰安所」の研究が困難なのは、こうした「地域史＝町史」から消されていることとも深く関係しているのではないだろうか。

移民送出町から軍需企業町へ

私が生まれた町に占領軍「慰安所」があったことを知って、私は初めて「船越町」に関心を持つことになった。

私の家の最寄バス停は「入川」といい、日本製鋼所の真ん前にある。私は市内の学校に通うためいつも利用していたから、ほぼ毎日、高い塀に遮られた日本製鋼所を眺めていたはずだ。しかし、父が働く、その高い塀の向こうに関心を持つことはなかった。父は高齢のため戦争には行かなかったが、職場では優秀な職人であったという。それはつまり優秀な兵器職人であったことを意味する。

船越町とは、「三井財閥系の巨大資本を背景とした東洋一の兵器工場」（『船越町史』p.319）である日本製鋼所を擁し、15年戦争末期「軍都広島市の衛星都市として空襲を受けることは避けられないだろうという不安と緊張感が

あった」（『船越町史』p.396）町である。日本の軍事的拡大とともに大きくなり、その日本製鋼所と深く結びつきながら急速に発展した町、それが船越町だった。

そして、今でも日本製鋼所は「国内唯一の大砲メーカー」（『朝日新聞』「第四部兵器産業①」1998. 6.3、『船越町史』p.462）であり、防衛費とともに安定・拡大しているというのだから、広島と呉に挟まれたこの町の役割は、戦前から何も変わっていないようだ。詳しく見ていく。

1975年に広島市との合併時にまとめられた『船越町史』（1981）の前に、『船越町郷土誌』（1960）が発行されている。和文タイプ、ガリ版刷り…ページをめくると、私が小学4年生の時に所属していた器楽班が「中国こども音楽会最優秀」を受賞したことも記録されている。さらになぜか器楽班全員の名前が掲載されている。考えてみれば、当時、町にとっては一つの事件だったのかもしれないと、懐かしく思い出しました。私の名前は「高尾菊子」になっている。ちょっと妙な愛おしさに駆られながら、さらにページをめくると、「第四節 人口動態」の章（p.7）に、興味深いデータがあった。私の知らない船越町の姿である。

*外国へ出稼者

明治四十年末	二八〇人	内在外国	二二八人
			(当時戸数 411 戸 人口 2,522 人*筆者挿入)
大正七年中期	八六〇人	内在外国	四一一人
			(当時戸数 450 戸 人口 2,661 人*)
最近	七一人	加奈太、ペルー、米国、布哇	
			(昭和 33 年 戸数 2,759 戸 人口 11,229 人*)

明治・大正期には船越町民の10～25%が出稼ぎに出ている。広島県が移民県であったことは知っていたが、足元の船越町からの移民がこのように多いことは知らなかった。

『船越町史』（1981）にはどのように書かれているのだろうか。移民項目があると思ったが、「人口・住民構成の変化」のなかに、さらりと「在外国への流出が多いことで、移民県の性格の一端が表れており、船越村も例外ではな

い。」(p.345)とあるだけで、実態や背景などの記述は何もない。「船越村戸数・人口の推移」(p.345)に拾ってみると、「明治43年 総人口2883人 内在外国人数254人」(約9%)「大正9年 総人口3340人 内在外国人数501人」(約15%)であることがわかる。

次に手がかりとして『広島県移住史 通史編』(1993)の「広島県の累計移民数の全国的位置」(p.9)「広島県の官約移民の郡市別・年度別統計」(p.72～73)「町村別累計移民数」(p.74)を開いてみた。それらによると、広島県が送り出し移民数として1899～1932年まで1位から3位を占めており、「船越町」について特定して書かれてはいないが、「安芸郡」の移民が多いことは明白で、その送り出し町の一つが船越町であったことは間違いなさそうだ。その経緯を追ってみる。

1880年前半は、出稼ぎ先は主に日本国内であり、1882～84年の間には、安芸郡からは北海道開拓民として移住していた。広島県の海外への本格的な集団移民は、1885年(明治18年)2月、ハワイへ官約移民222人が渡航したときから始まる。賃金が高く旅費が無料であることから安芸郡からもハワイに移住する人が増えてきた。

官約移民とは、日本とハワイ王国との間に締結された「日布渡航条約」(1886)および政府の「日本人移民ハワイ渡航約定書」(1884)に基づいて、1885年2月～1894年6月までの期間に労働を目的にハワイに渡航した契約移民をいい、約29,000人に上った。

その間の移民数を府県別にみると、広島・山口・熊本・福岡4県に集中しており、広島県は全国の38・2%を占めて全国1位である。さらに広島県の中の地域別を見ると、安芸郡は主に1位か2位であり、船越は、安芸郡の町村別では、14町村のうち5位であることから、相当な送出地域であったことがわかる。

1884年から始まった宇品港工事で、良好な牡蠣・海苔などの養殖漁場を失った半農漁民が多数出稼ぎに出た仁保島村の圧倒的な多さはあるが、広島湾を中心に、県西部の沿岸地域と太田川流域の町村が多く、この傾向はその後も変わっていない。

広島県の官約移民が広島湾沿岸地域に多い要因は、出稼ぎ風土があったことに加えて、農村不況、自然災害が重なったことが挙げられる(『広島県移住史』p.76)。先述したように1880年頃からは、北海道開拓民として移住する

人たちが出てきた。1884年までは、府県順で上位を占めていたが、1885年から順位が下がっているのは、ハワイへの官約移民が始まったことと関連があるのだろう。

軍事化・工業化による農村の疲弊、出稼ぎの慣習、多くの天災などにより、日本の、広島県の、安芸郡の、船越村にも「移民」の風が吹いていたのである。しかし1920年、東洋一の兵器工場・日本製鋼所が船越村に開業されて以降、その風は止んだ。

戦後は、サンフランシスコ講和条約締結後の1952年12月から、ブラジル・パラグアイ・アルゼンチン・ボリビア・ドミニカへの移住の道が開かれた。海外移民など私の家族には無縁だと思い込んでいたが、そう言えば、父は戦後、移民を考えたことがあったと言っていたのをかすかに思い出した。わたしが3～4歳のときだ。母の反対で諦めたらしいが、父がなぜ一度でも海外移民を考えたのか、聞いておけばよかったと後悔する。やはり子沢山家族の貧困からの脱出だったのだろうか。

アジア太平洋戦争・朝鮮戦争をくぐり抜けた日本製鋼所広島製作所

ハワイやブラジルへの海外移住の歯止めとなったと思われる日本製鋼所とはどのような会社なのだろうか。父は職工としてここで定年まで働いていた。戦況とともに拡大していた日本製鋼所で父が働き始めたのは1937～38年頃からと思われるが、父に確認したことはない。ともかく父が5人の子どもを養うべく実直に働いていたのは、うっすらと記憶にある。

日鋼の裏手に田畑を借りて米を作り、家の近くに畑を借りて芋など野菜も作っていた。日曜日には、稲刈りなど収穫時には手伝わされたし、家の便所の横にある半坪の空き地では鶏を飼い、新鮮な卵が食卓にのっていたのを思い出す。

そもそもなぜこの船越に戦前は「東洋一の兵器工場」、戦後は「40ミリ以上の口径の大砲が製造できる国内唯一のメーカー」である日本製鋼所ができたのだろうか。広島市安芸区と南区が接する海田湾沿いに川を挟んで東西に分かれ、兵器製造しているのは西側だという。

「日本製鋼所社史には連なり、軍事上の要点宇品港に接していた。さらに東洋一を誇る軍港呉を間近にし、加うるに、この地方は従来天変地異にほとんど襲われず、かつ有事の際には陸海軍によって十分防衛される安全の地域で

あった。」(『日本製鋼所社史資料』p.294)とある。

船越町の隣村、仁保村出身の松田重次郎によって見出された海田湾沿いの地域は、以後、軍需工場東洋工業とともに、日本の戦争を支え、戦後は朝鮮戦争特需で潤うことになった。冷戦終結後受注は低迷したというが、今でも「80人の大砲専門家」(『朝日新聞』1998.6.3)を抱える、国内唯一の大砲メーカーなのである。

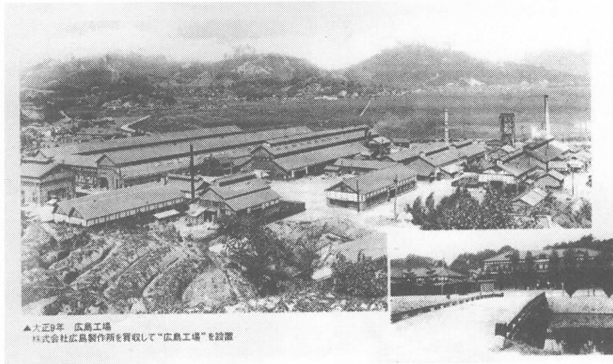


図3. 日本製鋼所広島製作所創業時(大正9年)の写真(『日本製鋼所百年史』より)

1938年(昭和13年)頃の主要製品は、陸軍関係(各種弾丸、爆弾、戦車砲、高射砲、榴弾砲、野砲、加農砲、戦車、潜航艇など)、海軍関係(各種弾丸、爆弾、砲身、砲塔、高射砲砲架、火薬缶、魚雷発射管など)であり、東洋工業の小銃生産を入れれば、多種多様な兵器がこの2社で作られていたことになる。

この間、日本製鋼所の前を呉に走る国道二号線の敷設、日本製鋼所の海田湾対岸にある陸軍運輸部、日本製鋼所などで朝鮮人がたくさん働くことになり、朝鮮人集落につながっていく。

敗戦後、米軍の指導で、兵器・弾薬・設計図などを破棄処分し、売り上げも低迷。1949年には700人解雇を発表した日本製鋼所では激しい労働争議が起り、「広島日鋼事件」³と呼ばれている。しかし、1950年朝鮮戦争前夜、米軍は日本製鋼所と兵器製造(98%が銃砲弾)の直接契約を結ぶ。「朝鮮戦争の勃発によってわが国経済にも「特需」景気が到来する。米軍や後には防衛庁(警察予備隊・保安隊)からの各種弾丸や兵器の受注や生産がおこなわれるよ

うになったことは、日鋼とくに日鋼広島にとって“干天の慈雨”であった』（『船越町史』 p.461）。

「広島日鋼事件」労働争議の時、父はどのような立場にいたのだろうか。闘う労働者だったのだろうか。さらに、朝鮮戦争をどう考えていたのだろうか。

マッカーサー元帥は1950年に警察予備隊設置指令を出し、隣町・海田町に配置した。朝鮮戦争が終わり、1953年には日本政府は「武器等製造法」を公布。日本製鋼所は改めて認可を受け、日本唯一の大砲メーカーとして再生した。ちなみに江田島にある中国化薬もこの「武器等製造法」に基づき米軍向け砲弾製造を開始している。

父から、アメリカが軍都広島に原爆を投下した8月6日8時15分には、会社が休電日で休みのため、船越から歩いて1時間くらいかかる比治山に薪を取りに行っていて被爆したという話は聞いた。しかしそれ以上のことは知らない。原爆手帳を持ち、82歳、前立腺癌で亡くなった。

私は父が50歳の時の子どもだ。私が小学校5～6年の頃、学校の正門近くにあった仁井鉄工所に勤めていた父を登下校中に見ることもあったので、それから計算すると、日本製鋼所の定年は60歳であったのだろう。末っ子は10歳、上は3人が中高生なのだから、呑気に引退などしてられない。職工としての腕が良かったという父は、すぐに下請工場に職を求めたようだ。以後、75歳まで何か所かの工場で働いた。

敗戦後から朝鮮戦争まで5年間の会社の不況を経験しているとはいえ、入社から定年まで、父は戦争好景気の中で過ごしたからこそ、ネスカフェとピーナツとプロレスを楽しみにしながら、なんとか子どもを大学まで行かせることができたのだろう。しかし「女は大学なんか行かなくてもいい」という父でもあった。

日本製鋼所広島製作所正門前にある「入川」というバス停から、時には、東洋工業（現マツダ）前のJR向洋駅から広島市内の学校に通っていた私は、その二大企業とその下請けの、隠された軍事性に気づかないまま、高度経済成長期をまっしぐらに生きていたことになる。

広島湾と軍都広島の衛星都市／海田・船越・府中の役割

朝日新聞が1998年「平和都市のかけで」と題した特集を組み、その第四部として「兵器産業」（1998.6.3 - 7）の現場を歩いたルポを掲載している。下

地図には広島から呉に至る沿線や島に兵器工場や基地がある事が示されている。広島市の東端、船越に日本製鋼所広島製作所、隣の安芸郡海田町に陸上自衛隊第13師団司令部、呉に海上自衛隊地方総監部、呉の対面の江田島に米軍秋月弾薬庫、中国化薬江田島工場が配置されている。

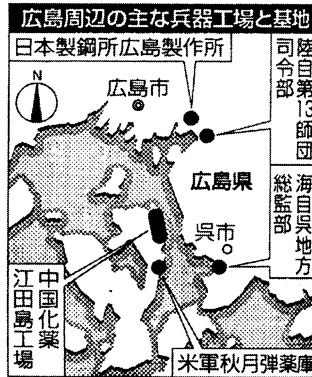


図4. 広島周辺の主な兵器工場と基地（『朝日新聞』1998.6.3より）

では、朝日新聞社が日本製鋼所とともに兵器産業の一つとして取材している「中国化薬」はどのような会社なのだろうか。

1947年旧陸海軍が捨てた弾薬を再利用する会社として発足し、防衛省から弾薬の受注をするダイキン工業やコマツの下請け会社として、弾薬に詰め込むTNT火薬を製造し、1953年から武器等製造法に基づいて、米軍向け砲弾製造を開始したとある。以前は対人地雷も製造していたが、1997年対人地雷禁止法ができて注文がなくなり、製造を中止している（『朝日新聞』1998.6.6）。同島内には海軍兵学校があり、米軍秋月弾薬庫がある。

また、藤目ゆき（2010）は「瀬戸内海の広島湾に面する広島・呉・岩国を結ぶトライアングル」を「広島湾軍事三角地帯」と呼び、「広島湾の原爆ドームを中心として、半径30キロの円を描くと、その中に多数の軍事基地群が存在している。広島湾の東20キロに位置する呉には海上自衛隊があり、西20キロに位置する岩国には海上自衛隊とともに巨大な米軍基地がある」（藤目、2010、p.1）ことを指摘している。

海田湾、広島湾周辺をよく見ると、どうやら「広島湾軍事三角地帯」（図

⑤) と呼ぶのもあながち大げさではないこともわかってくるが、「国際平和文化都市・広島」という看板の危うさを考えさせるものであり、ひいては広島
の加害性を考えるうえでも重要な指摘であることを強調しておきたい。

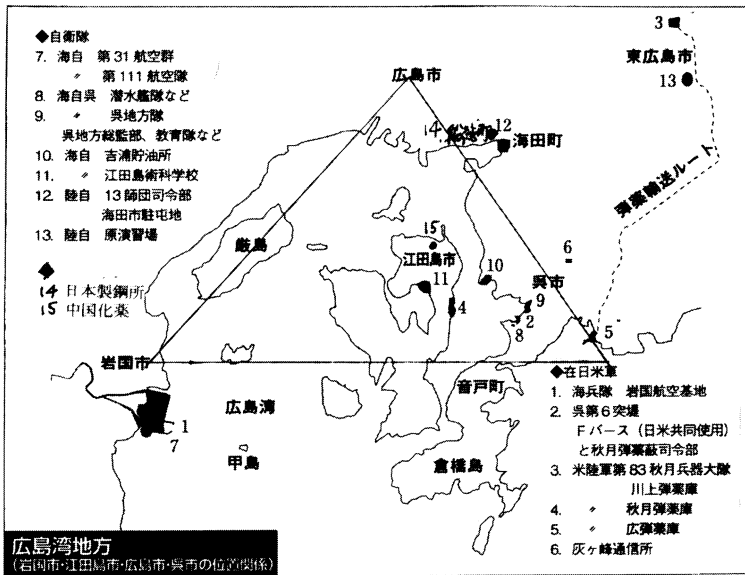


図5. 広島湾軍事三角地帯 (藤目、2010、p.52) 三角形線は筆者が記入。

船越町は1975年広島市と合併したが、同じ安芸郡であった海田町と府中町は合併を選ばなかった。海田町には自衛隊や多くの企業があり、府中町には東洋工業(株) (1984年から(株)マツダ)、麒麟ビール(株)があり、町財政が豊かだからだと言われていた。すると船越町には日本製鋼所があるのにと疑問もわくのだが。

それはさておき、船越町に住む何人かに聞いたことがある。「どこに住んでる？」と聞かれて、まず「海田」と答える。「海田のどこ？」と聞かれて初めて「あ、実は船越」と答えるというのだ。その理由は「海田はよく知られている町だから」という。つまりそれほど「船越は知られていない町」と住民自身が思っている町なのだ。日本一の大砲メーカーのある町、なのにな。

昔は宿場町であり、現在は山陽本線と呉線の分岐駅「JR海田市駅」と陸上

自衛隊海田市駐屯地（1950～）のある海田町。東洋工業(株)、キンビール(株)という豊かな財源を持つことになった府中町とは、いったいどんな町なのだろうか。

＜安芸郡海田町＞

宿場町で栄えた海田町だが、海田湾の牡蠣のほか埋め立て地に綿やブドウなども栽培し、地場産業も盛んだった。明治時代になって、海田は位置的に広島と呉という軍事拠点に挟まれた地域であり、山陽本線（1894）と呉線（1903）が開通し、戦争物資や人員輸送に重要な地となっていく。さらに15年戦争に入り、陸軍が土地を接收し、陸軍被服廠海田市倉庫、海軍第11航空廠もつくり、町全体が軍事色強い町になったようだ。

そして敗戦。「海田市に進駐した部隊は、米・英連邦軍いずれも広大な旧陸・海軍用地を接收し、県下における占領政策遂行の拠点となった」（『海田町史』p.639）。1945年10月、米軍は呉8,000人、広島8,000人、そして海田には3,500人が上陸している。すぐに「日米協会」が設立される。目的は「日本再建の為め米国の政治・文化・社会・道徳を学び、日本の短を捨て、長を採り、以て米国精神に融合一致し、世界平和を永遠に確立し、人類幸福の基礎を培う」。具体的には米軍兵舎前での難民バザー。英語学校。将兵慰問（演芸大会）などが頻繁に行われ、「県下に率先して」日米交歓事業を開催したとある（『海田町史』p.640）。

1949年米軍と入れ替わりに進駐していた英連邦軍が呉に撤退したため、接收用地は日本政府に返還されたが、1950年の「警察予備隊設置」に伴い、海田に警察予備隊が配置されることになった。今の海田陸上自衛隊の前身である。

1952年に米軍が弾薬陸揚げ設置のために海田湾掃海調査をしようとしたが、海田町当局は、「徒に国家防衛の国策に対し反対するものではない」が、「再び爆撃の焦点となる軍事施設を押し付けられる」ことには絶対反対と表明。中止に追い込んだ経緯がある。海田は元軍用地には教育・平和産業を誘致したいという強い希望があったという（『海田町史』p.651）。

＜安芸郡府中町＞

府中町は、飛鳥時代から平安時代末期にかけて安芸国の国府があったとこ

ろだった。政治・文化の中心地として栄えた町であるが、海田町と同様に有名になったのは、近代になって東洋工業(株)が開業してからではないだろうか。戦前から発売された3輪トラックは「バタンコ」と呼ばれ、庶民に親しまれていたことは幼心に記憶している。産業経済に貢献する車を発売していたからだろうか、府中町を走る国道二号線から海辺にかけて長く広く伸びる工場群は、その企業力を見せつけ、実際、社員の子どもたちには「エリート意識」があったことを記憶している。

その東洋工業とはどのような会社だったのだろうか。

安芸郡仁保村出身の技術者・松田重次郎は、1915年大阪で松田製作所(ポンプ製造)を創業。1917年故郷・仁保に帰郷し松田製作所を創業するが、1920年に日本製鋼所が松田製作所を買収、船越に移転した後1920年、東洋コルク工業(株)を創業(1927年東洋工業に名称変更)している。

1931年には3輪トラックを発売して名を挙げたが、1938年、陸海軍共同管理工場に指定され、小銃の生産を始めることになった。1941年には小銃工場が完成し、敗戦間近まで全国小銃総生産の約17.6%を占め、他にも多機種兵器を生産していた(『安芸郡府中町史』p.459～461)。

また、広島が原爆投下で壊滅状態になった1945年8月6日から翌年7月まで、広島県庁は東洋工業内に移転し、業務を行ったとある。

府中町にはもう一つ大企業があった。キンビール広島工場(1938-1998)である。現在その跡地は、イオンショッピングモールになり、そのため広島と向洋駅の間に新駅「天神川」が新設された。

キンビールが操業を始めた1938年は、東洋工業が政府から陸海軍共同管理工場に指定され、小銃生産を始めた年である。「当時、軍都であった広島市と呉市が共に約20万人の人口を持ち、戦争の進捗で近いうちに周辺の人口が70万人を超える事が予想され、終戦までに実際に100万人を超えた事で、有望な消費地が近くにあったこと、太田川水系の良質な水が豊富である事」(『キンビール広島工場50年史』p.11～18)などで進出したというキンビールだが、その思惑は外れていなかったようだ。

その後、東洋工業とキンビールという二大企業を抱える府中町は、財政豊かな町として有名になっていき、船越はますます「知られない町」となっていく。

概略だが、こうして軍都広島(の衛星都市としての)府中・船越・海田に焦点

を当て、その歴史を追ってみると、占領軍の進駐も占領軍のための「慰安所」も唐突ではなくなって来る。私の最初の驚きは、自分の町の歴史の無知から来ることだったことに改めて気づく。

しかし、『船越町史』には、「進駐軍の駐留」の項で、米軍が海田市に進駐し、町は賑わったこと、親善を図ったことなどは書かれているが、『広島県警察百年史』(p415)に明確に記述されている船越に設置された占領軍「慰安所」の存在に触れていないのは、どう考えても不自然だ。船越のその地域性と実像がつかめない。編纂時に意識的に排除したのでは、と考えるほうが自然と思える。

ところで、進駐軍は海田に進駐したのに、なぜ海田に「慰安所」をつくらなかったのだろうか。「慰安所」のあった場所については、どうも船越と海田の町境の海側のような感触があるのだが、場所は確定できない⁴。町史にもないし、安芸区役所に聞いてもわからなかった。何もわからないままである。

在日朝鮮人が多く暮らした／暮らしている町

それではなぜ船越町に多くの朝鮮人が暮らすことになったのだろうか。しかし「朝鮮人集落」⁵は、占領軍「慰安所」と同じように『船越町史』から消されていた。私が唯一見つけた資料は、『船越町郷土誌』(1960)の中のたった2行(p.7)。何年度かは記されていないが、「最近」とあるので、1958～59年当時だと推察できる。

*最近外国人で船越町在住者

中国人 壹人⁶ 朝鮮人 三〇七人 韓国人 五一四人 計 八二二人

昭和33年(1958)、私は小学4年生である。通称名で通う子どもを入れると、クラスに1割ぐらいいは在日の子どもたちがいたのではないかと。私にもすぐに思い出す同級生が何人かいるし、自宅の近くに朝鮮人集落があり、豚を飼っていたことは鮮明に覚えているから、日常的な船越の風景だったともいえる。しかし、船越の人口の7.3%を占めていたことは初めて知った。

『広島県史』によると、「敗戦当時の広島県内の朝鮮人人口は六万人前後ではなかったかと推定できる。これらの在日朝鮮人のうち二十一年三月までに約三万五〇〇〇人が帰還し、厚生省が連合軍司令部の命により朝鮮人登録

をおこなった同年三月十八日現在、二万四四一〇人が登録し、そのなかで帰還希望者は一万九九二二人であった」とある。

その内訳を「市郡別朝鮮人人口」（『広島県史』p.494）で見ると、安芸郡の在日朝鮮人人口は、1946年が2813人、1950年が1570人とあり、広島市について二番目に多いことがわかる。

後述のRさん、Tさんの証言にもあるように、朝鮮人は帰国を見込んで同胞にハングルを教えるために、大竹市に「国語講習所」（1945年12月）を開講したのを機に、各地に学校をつくっていくことになる。Rさん、Tさんの集落（船越町花都）にもつくられた。

広島県には1946年1月時点で36カ所（1カ所15～40人）あった「国語講習所」は、1947年3月には朝連初級学校として19校⁷に統合される（「広島朝鮮初中高級学校沿革史」広島朝鮮初中高級学校作成・2006、「広島同胞愛国運動の足跡」2000）。

しかし、1947年、日本政府は外国人登録令を出し、この時点で台湾人、朝鮮人を外国人とみなし、と同時に、マッカーサー元帥が「在日朝鮮人を日本の教育基本法、学校教育法に従わせるよう」指令、翌48年にはとうとう「朝鮮学校閉鎖令」を出すに至っている。

Rさんは、父親らが敗戦直後に創設した朝鮮学校（Rさんは「寺子屋」とも言う）について「県内に数十カ所あった朝鮮学校がつぶされました。【…】警察が来て、校舎に杭を打ちつけ、入れないようにしました。ひどいもんですよ」（筆者聞き書き、2011）と証言する。

その後1953年には海田町に広島朝鮮中級学校、1960年に高級部併設、1964年には、県内各初級学校を統合し広島朝鮮第一初級学校を創立し、1996年に「広島朝鮮初中高級学校」として広島市東区山根町に統合移転し、今にいたる。船越にあった第3初級学校は閉鎖令が出された後も運営されていたが、1964年に第1初級学校に統合された。

こうして、『船越郷土誌』の年表（p.45）にある、1948年（昭和23年）10月「朝礼時朝鮮児童の編入を行う」、1949年（昭和24年）11月「韓国人児童入学式」につながっていく。私は1949年生まれ。こうして在日朝鮮人の子どもたちと船越小学校で机を並べることになったわけだ。

ところで、なぜ船越町には戦前戦後このように朝鮮人が多く暮らすようになったのかはこの時点でも私にはよくわかっていなかった。軍都廣島の衛星

都市が必要とした人々とその子どもたちと言えるだろうが、その実相がなかなかつかめない。

「ひろしま『31年』被爆朝鮮人はいま(3) 生きているスラム」(『朝日新聞』1976.10.14 広島県版) という新聞記事がある。主に大竹市の朝鮮人集落のルポであるが、船越についても触れている。「広島市船越町。ここにも、戦時中、製鋼会社に徴用された人たちが住んでいた長屋がそのまま残っている。大竹市のスラムと同様、低地で、異常な湿気だ。どの家の畳も腐っていた。5年前、真ん前に公社のビルが建ち、日照が奪われた。しかし住民はほとんど抵抗しなかった。」とある。この記事にある朝鮮人集落は、私の通学路にあった集落ではない。船越町内には3ヵ所あったのだ。

船越町に生まれ育った在日朝鮮人2人の証言

町史から消されてしまった「船越町在住の / 在住していた在日朝鮮人」にお話を聞きたいと切に願うようになった。幸運にも、船越で一番大きな朝鮮人集落、先の新聞記事にある地で生まれ育ったRさん(男)、Tさん(女)を紹介していただき、お話を聞くことができた。お二人のお話からなぜ船越町に在日朝鮮人が多く暮らしているのか、どのような暮らしをしていたのか、当時の状況がよくわかる。今となつては、ほんとうに貴重な“証言”である。あえてまとめず、聞き取ったことを整理するだけにした。(文責筆者)

● Rさん(75歳、男性、2011年聞き取り)

——Rさんが住んでいた朝鮮人集落は船越町のどこで、どのくらいの規模でしたか。

船越町花都、今の海田電話局の側を降りたところですよ。海田川と二号線の側。田んぼとブドウ畑の中にハーモニカ長屋が4棟ありました。10軒長屋が3つ、20軒長屋が1つ。セメン瓦の薄い壁でしきられ、隣の声が聞こえるような家でした。一部屋8畳と2畳と台所、だったと思います。狭いもんです。1世帯に大体5～6人いたから、50世帯、250～300人が住んでいたでしょう。三沢という人が家主でした。

——なぜそのような大きな集落ができたのでしょうか。

一つは、その頃広島県会議員で檜山袖四郎というのがいて、鴻治組という

建設会社をやっていました。そこが国道の敷設を受けていた。もう一つは、日本製鋼と並んで川向こうに大きな陸軍運輸部⁸があって、そこで朝鮮人が働かされ、もう一つ、日本製鋼所が兵器を造っていて、徴用工として働かされていました。荷場に宿舎跡がありますよ。以前、私は日本製鋼に資料を求めましたが、「GHQがすべて書類を持っていった」と言っていました。戦後は満州引揚者の宿舎になったようです。

徴用工が「なんか食べさせてくれ」と朝鮮人集落によくやってきました。待遇が悪かったんでしょう。そのうち一軒ごとに決まった徴用工を受け入れ、食べさせるようになりました。

——敗戦当時の集落はどのような状況でしたか。

戦前は協和会という組織がありましたが、これは朝鮮人の日本人化をすすめるために作られたものです。父は会長でした。戦後すぐ1945年10月に朝鮮連盟全国大会が開催され、祖国に帰るためと、権利擁護のために、ハンダルの教えたりする寺子屋を作りました。父はその運動に参加したのです。220～230万人いた在日朝鮮人は祖国へ帰るつもりでしたから。

それが1949年にアメリカが朝鮮戦争を始める前、日本を安定した後方基地にするために朝鮮連盟を解体し、県内に数十カ所あった朝鮮学校がつぶされました。自分らの寺子屋は、民家を改造したもので、警察が50～60人来て、校舎に杭を打ちつけ、入れないようにしました。ひどいもんですよ。船越・西条・君田にあったと思います。解体されたんで仕方なく、船越小学校に行くようになったわけです。

西古谷（筆者が住んでいた部落）には確か20軒ぐらいあって民団系の人たちが養豚をしていました。朝鮮人は帰国するために宇品を中心に芸備線沿いの方から海岸に出てきていた、たぶんそういう人たちだったと思います。瀬野川から海田湾に出て、小さい漁船に5～6人乗って帰国しようと釜山に向かった人たちもいます。9、10月は台風があつて、玄界灘も波が荒いから、きっと死んだ人も多かったと思います。また、下関まで行った人もいる。当時日本は何もしなかったから。基町の土手筋にあった掘っ立て小屋に住んでいた人も、帰国するつもりだったんですよ。

暮らしは土木中心でしたが、闇で焼酎を造って売っていました。その糟を使って養豚業も。1960年初めまで、福島町からも買いに来ていました。

うちの母は、戦時中はチマチョゴリや反物を行商していました。父はイン

ゴ(銑鉄)を日本製鋼所に運んでいました。戦後は中国輸出用に大島で干しナマコを製造していたときもあり、このわたをよく持って帰っていました。また、ぼん菓子を作って、荷場の東隣にあった問屋におろしてもいました。うちは長屋を二軒借りていて、その一軒でぼん菓子をつくって袋詰めしていたんですよ。

その父母は1960年に朝鮮民主主義人民共和国に帰国。姉は東京で結婚し家族で1975年に帰国しました。姉はとても優秀で、小学校で級長していたぐらいです。当時朝鮮人で級長になるなんて考えられない時代ですよ。

——Rさんの被爆体験をお話いただけますか。

9歳のときです。うちの父は本家の本家で血統主義。日本は家紋主義ですね。7月に入って呉空襲があって、アメリカの飛行機、艦載機がしょっちゅうやってくるようになりました。しばしば警戒警報が鳴る。ウーン、ウーン、とサイレンが。父が船越も爆撃されるかもしれないと思い、海田の山にバラックを建てることにしました。わしは長男だから大切にされている。そのバラックを建てる間、島根の親戚に疎開させられました。いよいよ完成して父が迎えに来て、8月6日に出発。備後落合から広島行きの汽車に乗ったが、芸備線は単線。広島からの汽車は窓が壊れ、被爆者がぎっしり乗っていました。車掌さんが「今日の朝広島に大きい爆弾が落ちた。広島まではこの汽車は行かない」という。地獄を見たことはないが地獄でした。それから歩いて帰りました。

父は、ハーモニカ長屋では字が書けるし、指導的立場にもありました。人に頼まれたら断らない。お金も貸すし、なかったら母の服を売ってでも貸すような人でした。6日も、長屋である人が花札をして捕まり、吉島に収監されていた。その奥さんが面会に行くのでついてきてくれ、と頼まれたらしいのですが、私を迎えに来るのでそのときだけ断ったようです。もし、ついていっていたら、死んでいました。私は一生の親孝行をしたわけです。

家に帰るのに、二葉の里を通り、府中町を通ったんですが、土橋というところで幽霊を見たんです。土橋を渡りきろうとすると、暗いんですが、後ろから「み、み、みず」という声がする。振り向いたら男か女かわからない。まだ9歳だから怖くて父にしがみついたんです。もし私がしがみついていなかったら、父のことだからきっと水を飲ませたでしょう。私はその人を見殺しにしたわけです。それがずっと気になって、その橋に毎年供養に行きます。

2年後に高熱が出て一週間ぐらいで髪が抜けました。当時原因は分からなかったけど、これは原爆症の典型ですよ。ハゲ、ハゲ、言われてね。高校からは東京に行ったけど、広島から来た、と言うと、周囲が逃げていく。結婚もあきらめた時期がありました。2年前に肝臓がん、そして食道がんになり、入退院を繰り返しています。発見が早かったから、こうして生きているけど。

当時は23～24歳で結婚していたからね。父母は国に帰り、一人でこちらにいと、知り合いが心配して見合いを強制的にさせられた。年上の人には逆らえないからね、結婚しました。3人子どもがいる。

60歳になって、原爆手帳を申請しました。保証人がいないから、陳述書を50ページぐらい書いて。なぜこれまで申請しなかったか、なぜ今申請する気になったか、そして被爆の状況など。2008年には原爆症の認定を受けました。役人が島根から帰ってきたのがなんで8月6日だと覚えているのかと聞くから、8月6日だから覚えてるんですよ、と言ったようなことで。

● Tさん（60歳、女性、2011年聞き取り）

敗戦後すぐ、我先に朝鮮に帰ろうとする人たちが下関に向かい、玄界灘を小船で渡ろうとして行き倒れた人は多かったと聞きます。解放されて混乱もしていたので組織をつくる必要があったのでしょうか。両親は京都で結婚し可部町に住んでいましたが、朝鮮連盟立ち上げのとき「インテリで適任者」と請われて船越に移り、父は委員長を1年務めました。旗揚げ時、比治山で決起集会をしました。24歳でした。私の記憶では、庭付きの大きな広い一軒家も用意されていました。家主は「三沢」という人です。進駐軍（豪軍）がサイドカーに乗って訪問して来たのを覚えています。父が進駐軍物資部と仲が良く、いろんなものが手に入っていました。進駐軍の鼓笛隊がパレードしたりして、かっこよかったです。

私が住んでいた朝鮮部落は花都というところにあり、強制連行で防空壕を掘ったりした人たちが住んでいたと思います。私の家族は朝鮮人部落を見渡せる土手のところにありました。「花都八部」と呼ばれていました。当時「八部」は「村八分」の「八部」だと思っていました。七部（入川・荷場・竹浦）には満州からの引揚者が住んでいました。普段は船越と言わず、隣町である「海田」と言っていました。海田駅には準急が停まるし、人がよく知っていま

したから。

当時は密造酒を造っては矢野・熊野に売りに行って生活をしていました。夜中に警察が取り締まりに踏み込んで来ていましたが、父は英語を話したので、GHQと毛布の交渉とかしていました。長屋にはバラックの民族学校があり、父はその創始者の一人ですが、ハングルの文字や歴史を教えていました。識字学級ですね。L字型のなかにマダン（日留田製作所を降りたところ）があり、分断前の朝鮮学校の基本になっています。

他に、朝鮮人集落は西古谷と今の区役所の後ろのほうにもあって、船越には3カ所ありましたよ。西古谷の朝鮮人集落は家は少なかったけど、豚小屋が他より大きかったと記憶しています。

朝鮮人と向き合い続けた豊永恵三郎さん

RさんとTさんを紹介してくださったのは、長年、在韓被爆者支援活動に携わっている豊永恵三郎さん。テレビや新聞でときどきお名前とともに、船越在住であることを知って、一度お会いしたいと思いつけてきたお一人であった。

豊永さんは、被爆直後から母親の実家がある船越町で暮らし始め、1958年から広島電機大学付属高校（現広島国際学院高校）の国語教師として赴任。1971年、教育研修で初渡韓したとき、ソウルにある韓国人被爆者の事務所を訪ねたのをきっかけに、すでに大阪で結成されていた「韓国の原爆被害者を救援する市民の会」の広島支部を設立し、以降、一貫してその支援活動に力を注いでいる。

豊永さんは「それは船越で朝鮮人差別をした自分の原点だから」という。2011年にはその活動が認められ、韓国政府から「外交通商部長官賞」を受賞した。こうした地道な活動をされてきた豊永さんだからこそ、在日の方からの信望も厚く、Tさん、Rさんからお話を聞くことができたのだ。

豊永さんには、もう一つ力を入れて継続している活動がある。被爆体験を修学旅行生などに語る「語り部活動」である。1984年に13人で「ヒロシマを語る会」結成し、2001年に解散して以降も、複数の病を抱えながら請われれば出かけて「語り部」活動を継続している。「自分が被爆者であるという自覚をしたのはRさんのおかげ」だという豊永さん。ご自身の「在日」体験の原点とはどんな体験だったんだろうか。

——被爆直後から船越町に居るおじいさんの家で暮らしました。在日同胞たちがたくさん町にいました。日本人にはとても差別意識がありました。豚を育ててましたから汚物回収時の臭いがひどく、恐ろしい存在として映っていました。彼らを排除もしました。反対に近づいて行くことができませんでした。朝鮮戦争勃発直前、民族学校が潰され、朝鮮人が来ました。私の班には7人位来ました。この様に7～8人位の朝鮮人の子どもたちがいたら日本人たちは恐ろしかったです。年は一歳上でした。Rさんはその一人です。民主教育時代なのに先生はなぜこのように朝鮮人が多いのか一言も言いませんでした。日本語がうまくない子どもたちは多かったです。運動が良くできる男性たちは有名な選手になることもありました。班長になる子どももいました。そのときはわからなかったけど、考えてみれば日本人たちはひどく差別をして来たことを漠然とではあるが感じていました。私自身の原点になりました。

豊永さんには、高校教師のときに起きた在日をめぐる忘れられない出来事がある。

——広島へ民族学校ができました(1953)。私の学校も同じ町にありました。子どもたちの間には喧嘩があるものです。当ても朝鮮人をひどく差別した日本人の生徒と民族学校生徒の喧嘩が絶えませんでした。日本の7つの学校が朝鮮学校の子もたちと喧嘩をするという計画を立てたことを知ることになりました。朝鮮学校の先生たちに止めてくれと要請し、なんとか中止させましたが、その後も小さい喧嘩はたくさんありました。

こんな状況をどのようにしたらいいだろうかと考えました。先生同士の交流、学生同士の交流をしましたが、表面的な対策に過ぎません。そこでわたしは朝鮮学校の先生に学校へ来てもらって朝鮮語を教えてもらおうと考えました。実際、大阪には二つの学校ですでに事例がありましたから。でも、広島の初めてのとても困難な試みでした。

大阪の事例とは、兵庫県立湊川高校定時制における朝鮮語授業のことで、1973年から公立では初めての正規授業であり、詩人・金時鐘さんが初代担当講師を務めた。金時鐘さんはその定時制での生徒との出会いを「さらされるものと、さらすものと——朝鮮語授業の一年半」という胸の熱くなるエッセー

を書いている。

この困難な教育実践に、この広島で取り組んだ先生が豊永さんだ。豊永さんの「揺るぎない原点」は一貫したものであり、人として感銘を受ける。このような人が同じ船越の住民であったことを知り、先述とは違った意味で船越が近づいてきた。

私は、豊永さんからもう一つ学んだことがある。それは、「在日体験」とは誰の、どのような体験を言うのかということだ。考えてみたら、私たちは「在日」の人に「在日体験」を語ってもらうことが多い。これまでその機会を奪い、奪うだけでなく差別をしてきたのだから、差別される側の語りに耳を澄ますことは重要であることは言うまでもない。

しかし「在日体験」を語るができるのは、在日の人だけなのだろうか。そこには「語る側、語らせる側」という一方的な関係が生まれているのではないだろうか。在日の人語る分と同じだけ日本人の「在日体験」はあるのではないだろうか。そんなことを考えるようになった。

在日の人「在日体験」を、日本人が日本人の「在日体験」を、私が私の「在日体験」を語る。そしてそれらが交差する。交差するような「場」を作る。こうした実践をすることでしか、「語る側、語らせる側」という一方的な関係を解き、「語り合える」関係をつくることはできないのではないかと思えてならない。

私は一つの試みとして、在日朝鮮人の友人らと『広島同人誌あいだ』を創刊(2018.11)した。男と女のあいだ、広島と呉のあいだ、府中と海田のあいだ、朝鮮人と日本人のあいだ、戦前と戦後のあいだ、記憶と忘却のあいだ、さまざまな「あいだ」が蠢く〈場〉になることを願っている。

おわりに

2012年2月のある日、携帯電話が鳴った。「船越小学校を卒業された高雄さんですか？来月卒業50周年の同窓会を開催します。出席しませんか？」。幹事だというMさんからだった。名前はかろうじて覚えていた。50周年なので、わかる限りの人に連絡を取っているのだという。私がある時点で「船越」と再会していなかったら断っていたかもしれないが、そのときは「出席します」と即答していた。

結局、私は二人の男子(だんし!)と意気投合し、あらためて船越を一緒

に散策することになった。街歩きをした終盤は、岩滝山から船越町の全貌を臨みながら、小学校時代の記憶を引っ張り出し、楽しんだ。

当時、遊びにジェンダーがあったようだ。K君によると、男子たちは学校の裏手にある岩滝山で遊んだり、日本製鋼所近くの海田湾まで出かけていたという。「たそがれ時の海田湾の沖合に、クジラのような黒っぽい物体が不気味な姿をさらして浮かんでいたのを何回も見た。船越町の南端に潜水艦の製造所やドックがあったことも知った」(K君談)のだという。さらに「女の先生で朝鮮人をとても差別する人がいて、すごく嫌だった」とも。当時からそんな意識を持っていたK君と50年ぶりに再会できたことを素直に喜んだ。その後も、隣の府中町、海田町、広島市内を散策し、旧交を温めている。

私が通学する学校は、広島市西区己斐町にあった。己斐駅(現西広島駅)からバスで八丁堀へ、八丁堀から海田行きか呉行きのバスに乗り20分、日本製鋼所の前にある入川停留所で降り、目の前の二号線、さらに山陽本線が通る踏切を渡るとすぐ左手に朝鮮人集落があった。短い坂を利用して豚小屋が作られていて、餌を食べる豚が丸々見える。時々目が合うが、臭いに負けて早く通り過ぎることばかり考えていた。それから狭い路地を入り、二軒長屋を二つに分割した我が家にたどり着く。行きはほぼこの逆をたどり、6年間通った。高校卒業後、銀行勤め、他県への大学進学、卒業して、就職先のない私はまた船越町の我が家に帰った。1974年のことだ。そのときにはすでに朝鮮人集落は跡形もなくなっていた。

5人の子どもを食べさせ、教育を受けさせることで精いっぱい両親とその子どもたちは、それぞれの経験を語り、共有するという家族文化を持たなかった。だから父の戦争体験、原爆体験、労働体験、母や姉の「女の体験」など聞いていない。そして聞こうとする態度も私は培っていなかった。

かくして、私は家族という「小さな物語」を紡ぐことさえできないまま、ウーマン・リブ、フェミニズムに出会うまで、国家、戦争という「大きな物語」にも出会い損ねてしまった。というより、むしろフェミニズムに出会っていたからこそ、「出会い損ねていた」ことの意味を考えることになり、「記憶」という問題に接近することになった。

米山リサは、現在、「記憶」を分析枠とすることが盛んであることに対し、「記憶」にとって大切なのは、「抑圧」や「排除」や「否認」をとともなうコンセプトだ」(『被爆70年ジェンダー・フォームin広島「全記録」』、ひろしま女

性学研究所、2016) と述べ、さらに以下のように続ける。

過去に起こったこととして述べられたり、感じたりされていることや、表象されていることの背後に、何が、誰の声が、どのような理由で隠されているのか。また、抑圧され、排除された存在がどのようなかたちで没し、わたしたちが今みえていると思っている世界に憑りついているのか。「記憶」というコンセプトとは、それらの仕組みを考える手がかりでなくてはならない。(p.426)

さて、私の「謎解き」は、船越町の「歴史を忘却する記憶の仕組み」(米山、2016) を少しでも明らかにすることができただろうか。

注

- ¹ 敗戦直後に「性の防波堤」としてつくられた占領軍「慰安所」だが、同時期、旧満州に取り残された開拓団が生き延びるために、旧ソ連兵らを「性接待」したことが明らかになった(朝日新聞デジタル 2018.11.18)。「性接待」は、岐阜県の旧黒川村などから吉林省陶頼昭に入植した開拓団で 1945 年 9～11 月にあった出来事。現地住民による略奪暴行から保護をせよ見返りに、未婚女性約 15 人が差し出されたとある。戦後伏せられ、1982 年に「乙女の碑」が建立されたが、その理由は碑文ではなく、2018 年 11 月 18 日、「乙女の碑」に当時の経緯を伝える碑文ができ、除幕式とともに、当事者・佐藤ハルエさんが体験を語った。また、『鉄と石炭と女』(ひろしま女性学研究所、2013) に、著者石井出かづ子が満州からようやく辿り着いた韓国のある港町での自らの体験を記している。ある男性が「この団体の世話役から、あなたに公安局(韓国の警察)へ行ってくれ」と言ったという。その時、石井出は「村か町の公安局へ私を慰安婦的な都合のいい道具として送り込んで、引き揚げを何とか早く進めることを頼もうとするのだろうか」と考え、「この倉庫にいる引揚者の団長になっておられる方には、たしか私と同じくらい娘さんがいらっしやるでしょう。その方が行かれるのなら私も一緒に行きますから」と答えたという。結果、「私も団長の娘も行くことはなかった」(p.43 - 44) とある。
- ² 山代巴は『基地と娼婦の広島湾』(新日本文学広島支部、1952) という冊子を出している。サンフランシスコ条約締結が決定された 1951 年ごろ、朝鮮戦争の激化にともなって、江田島や呉、東広島、海田などをルポし、「呉、江田島を中心とする広島湾全体が米軍の基地化されている」(p.7) と結論づけ、特に、「慰安所」閉鎖後、「パンパン」として生きた女性たちに目を向け、「何がパンパンにさせたか」(p.12～25) と問題提起している。「日本に外国軍隊の基地があるかぎりパンパンの数はつきないだろう」(p.24) という一節が現在を映し出している。
- ³ 「原爆の図」(1948～1972) で知られる丸木俊には、油彩画「広島製鋼事件によせて」(1949) という作品がある。小沢節子は「再考・丸木俊の画業 裸婦と朝鮮人女性の表象」(『ジェンダーが拓く共生社会』論創社、2013) のなかで、丸木が朝鮮人をどのように表象してきたかを、これまで知られてきた「原爆の図第 14 部(から

す)」(1972)から「広島製鋼事件によせて」にまでさかのぼってこう記述している。「画面の中心には、前屈みになって左手を見据える若い裸婦が描かれ、彼女の背後には怯えた表情で寄り添う裸足の幼女がいる。裸婦の背後に描かれたもう一人の女性の衣服がチマ・チョゴリであり、女性が朝鮮人であることを示している」とし、さらに「二人の女性が日鋼争議の労働者の妻・家族であることを語っているのであり、彼女たちは画面の外側にいる何者かに向かって、路上の石を拾い、投石している」という。しかし、何ゆえ、「日鋼事件」が一人の裸婦と怯える少女とチマチョゴリの女性として表象されるのか、ジェンダー視点から今後の課題としたい。

- 4 山田盟子著『ニッポン国策慰安婦 占領軍慰安施設・女たちの一生』（光人社、1996）の「GIと広島」のなかに、忍甲一著『史実から抹殺された「米兵専用慰安所細見」から引用したとして、「とりあえず各駐屯地に近い旧日本陸海軍の倉庫、兵舎、軍需工場跡地、民間家屋などを利用して、海田市一南堀川、呉一吉浦、宮島一厳島の各地に一カ所ずつ、呉一広に二カ所、計五カ所の「官娼」慰安所が新設された」（p.115）ことを紹介している。地図で確かめると確かに進駐軍が進駐し、現在は海田自衛隊駐屯地である場所に近い。しかし、山田自身がそれを検証したという記述はなく、広島県警察百年史に書かれていた「船越町」との相違はなんなのか、真偽のほどはわからない。
- 5 「〈戦後〉とは何か？」という問いに、思想・制度・表象という視点から7人が論じる『〈戦後〉の誕生』の編者権赫泰は、「日本の「戦後」は「朝鮮」を消去することによって成り立っている、つまり日本の戦後は「朝鮮」（をはじめとする旧植民地）の消去の上にあるというところにある」と喝破する。町史からの「朝鮮人集落」の消去は、さしずめその典型的な出来事と言える。
- 6 1944年国民学校6年生だった湯木昭八郎は、ヨモギを呉線の線路わきで刈り、矢野町の近くにあった広島港運株株式会社へ運んでいたときに見かけた中国人労務者について調べ、後日、冊子『矢野に来ていた中国人労務者のこと』（2009）を発行している。それによると、「中国人4万人近くの中の416人が矢野に来ていた」ことを突きとめている。在船越外国人として「中国人 壱人」とあるが、そのことと関係がある可能性も否定できない。
- 7 19校の所在地は、本校＝天満・大竹・古市・花都・広・呉・三原・賀茂・落合、分校＝尾道・可部・君田・宇品・観音・八重・大朝・庄原・高田・東城（「広島同胞愛国運動の足跡」2000）
- 8 軍都広島と朝鮮半島のつながりについて地下壕をテーマにドキュメンタリービデオ『土の記憶』（2005）を制作した伊藤園実は、映像だけでは伝えきれなかったことを「広島における地下壕と朝鮮人労働者 ドキュメンタリービデオ『土の記憶』フィールドノート」としてまとめている。そのなかに、陸軍運輸部には朝鮮人だけではなく、中国人も動員されていたこと、その現場がいかに過酷であったかを、朝鮮人Fさんが以下のように証言していることが紹介されている。「海田にあった陸軍運輸部には中国人捕虜がいた。飯食わさんでしょ。腹減らしたまま、朝から晩まで100キロ近くある生ゴムを下からあげて行って本船に運ぶ。見たらその生ゴムを首に巻いてどぼんと落ちる。自殺よね」（p.95）

引用・参考文献

- 石井出かず子、2013『鉄と石炭と女 石井出かず子の戦後史』ひろしま女性学研究所
- 伊藤園実、2006「広島における地下壕と朝鮮人労働者 『土の記憶』フィールドノート」『部落解放研究第13号』
- 江田島町編、1982『江田島町史』江田島町
- 大竹市役所、1970『大竹市史 本編第2巻』大竹市
- 小沢節子、2013「再考・丸木俊の画業―裸婦と朝鮮人女性の表象」『ジェンダーが拓く共生社会』論創社
- 海田町編、1986『海田町史 通史編』広島県安芸郡海田町
- 河原勇編、1968『日本製鋼所社史資料』日本製鋼所、上・下巻
- キリンビール広島工場年史編纂委員会編、1988『キリンビール広島工場50年史』キリンビール広島工場
- 呉市史編纂委員会編、1995『呉市史』第8巻、呉市
- 権赫泰・車承棋編、2017『〈戦後〉の誕生 戦後日本と「朝鮮」の境界』新泉社
- 阪上史子、2016『大竹から戦争が見える』ひろしま女性学研究所
- 日本製鋼所社史編纂委員会編、2008『日本製鋼所百年史 鋼と機械とともに』日本製鋼所
- 広島市役所編、1981『船越町史』広島市役所
- 高雄きくえ編、2016『被爆70年ジェンダー・フォーラムin広島「全記録」ヒロシマという視座の可能性をひらく』ひろしま女性学研究所
- 広島県警察編さん編、1971『広島県警察百年史』、広島県警察本部
- 広島県編、1993『広島県移住史 通史編』広島県
- 広島県編、1983『広島県史 現代』広島県
- 平井和子、2014『日本占領とジェンダー 米軍・売買春と日本女性たち』有志舎
- 福山市史編纂会編、1978『福山市史 下巻』福山市
- 藤目ゆき、2010「刊行にあたって」『アジア現代女性史』第6号、アジア現代女性史研究会発行
- 船越町役場総務課編、1960『船越郷土誌』広島県安芸郡船越町
- 府中町史編修委員会編、1979『安芸郡府中町史』府中町
- ミチコ・ミッチ・アユカワ、2012『カナダへ渡った広島移民 移住の始まりから真珠湾攻撃前夜まで』和泉真澄訳、明石書店
- 山代巴、1952『基地と娼婦の広島湾』新日本文学会広島支部